

V “Cold Water”をめぐる留学生との意見交換 ——カルチャーショックを乗り越えるために

ジェーン・バクニック
メディア教育開発センター
佐藤 勢紀子
東北大学

1. まえがき

1996年6月26日、東北大学留学生センターにおいて、アメリカにおける留学生のカルチャーショックの問題を扱ったビデオ“Cold Water”をめぐる討論会を開催した。討論会の企画は、バクニック、佐藤の両名によるもので、留学生センターの吉本啓教授の協力を得て留学生の有志を募り、バクニックの解説・指導のもと、ビデオを視聴しながら討論を行った。

参加学生は計10名で、出身国は、アメリカ合衆国（2名）、マレーシア（2名）、韓国（1名）、中国（1名）、シンガポール（1名）、タイ（1名）、ドイツ（1名）、ラトヴィア（1名）であった。学生の身分は学部学生、研究生、大学院生と一様ではなく、各自の日本滞在歴や異文化体験も様々であった。

討論会は約1時間半にわたって行われた。カルチャーショックという、やや重いテーマであったが、時折笑いのわき起こるリラックスした雰囲気の中、各自の体験をもとに、熱心で活発な意見交換が行われた。以下は、討論会の内容の記録である。

2. 討論

“Cold Water”の背景

バクニック ビデオについて、背景のことを説明しましょう。このビデオは、アメリカにきている留学生のために作られたビデオですが、日本にきている留学生にも、似た体験があると思います。ところどころお見せして、どのぐらい面白いのか、教材として使えるかについて、皆さんの体験や意見を聞かせてもらいたいと思います。

このビデオの題目は“Cold Water”です。“Cold Water”といえば、日本語で「冷水」で、もう一つの意味は大ショックという意味です。そのショックというのはculture shockで、このテーマについて、このビデオは制作されました。

制作した人はオガミノリコという人で、オガミさんは、アメリカのボストン大学の留学生として、国際コミュニケーションプログラムを専攻して、修士論文のかわりにこのビデオを作りました。留学生のオリエンテーションのために作ったもので、留学生自身が自分の体験について話します。13人のいろいろな国から出た人が代表としてカメラの前に出て、とてもうまく話しますから、簡単にできたように思われるかもしれませんが、ここまで来るのに、ずいぶん準備が必要でした。

まず、100人の留学生を選んで、インタビューしました。その100人から50人を選んで、それからまた、その50人から25人を選んで、3回目のインタビューでやっとビ

デオに入れました。そこまで、1年かかりました。それからまた13人を選んで、編集したりして、48分のテープを作りました。そこまで行くのに、いろいろの苦勞があったわけです。

カルチャーショック

バクニック 次に、カルチャーショックというテーマについてお話ししたいと思います。カルチャーショックと言えば、だいたい外国に行ってショックという感じで受け取りますが、外国に行かなくても、だれでもカルチャーショックがわかるはずだと思います。たとえば、もし、住んでいるところから引っ越せば、いろいろ知らないことが出てきます。これは、社会的、心理的、生理的に不安なことです。まず第一に、まわりの環境がわかりません。道に迷うし、近所ではどこで安くてもいい買い物ができるかわかりません。社会的にもまだ人間関係ができません、まわりにはまだ結びついてない状態です。こういう状態は、国内でもあるんです。ミニカルチャーショックと言ってもいいと思いますけど、だいたい国内の場合はカルチャーショックとは気がつかないと思います。

もちろん外国に行く場合は、同じような迷っている状態が国内よりずいぶんひどく感じます。たとえば、言葉も通じません。道がわからない場合は、国内ではだいたい聞けば教えてくれますが、言葉が通じないと、何もわからないで、迷います。国内の場合は、誰も友達がいないところでも、電話で話すことができますけど、国際的には、国際電話をそんなにすればお金がかかると思います。孤独で、友達がいない状態です。

浮遊感覚

バクニック 日本語にも、英語にも、その状態を表すことわざがあると思います。He/She doesn't have his/her feet on the ground. 日本語で「地に足がついてない」ということです。また、like a fish out of water といいます。その意味は、水から出た魚。日本語でも、「陸に上がった河童」ということわざがあります。a fish out of waterの意味は、全く違う世界に迷い込んでしまったという意味で、全然わからないところ——わからない世界に入ってしまった状態です。「陸に上がった河童」は、違う世界に入って、彼に合っていない世界に困ってるんです。ちょっとニュアンスが違いますけど、どちらもわからない状態で、違う世界に入ってる感じです。

そのことわざの意味をもっと深く見ると、人間がまわりの環境に全く結びついていない状態で、これを浮遊感覚といいます。空中に浮かんでいる状態で、足が地についてない、根を下ろしていない状態です。これは全く留学生の状態に当たっていると思います。このビデオは、そのことをテーマとして作られています。

それでは、これから、ところどころ部分的に見せて、説明します。

“Cold Water”

Segment 1: Mixed Feelings:

“I had mixed feelings”
“excited”
“frightened and anxious”
“exciting feeling of entering something new”
“happiness”
“expectation”
“lost with the language”
“apprehensive about friends”
“isolated”
“For me it felt like jumping into the cold water.”

バクニック これは、最初の頃の来たばかりの印象ですが、言葉がわからないとか、友達が作れるかちょっと心配で、いろいろ期待してる気持ちもあったんですけど、最後に、ドイツ人だったと思います、私にとっては冷たい水に飛び込むような状態だったと言っています。その気持ちは、日本にいる場合は、伝わるんでしょうか。同じような気持ちですか。違う気持ちですか。自分の経験を話してください。“Cold Water”の気持ちだったんですか。“Cold Water”を感じた人、ちょっと手をあげてください。

学生 もっと冷たい。(笑)

学生 Ice water. (笑)

バクニック “Ice water”の感じだったんですか。ほかには、どうでしたか。来る前とか、来たばかりの気持ちは？

学生 Curiosity.

学生 1 日本だから、危険だと思った。

バクニック 危険。

学生 1 地震。

学生 ああ。

バクニック そうですね。台風とか、地震とか。ほかには。

学生 Excited.

バクニック いろいろ同じように、happy とかこわいとかいっしょに感じたんですね。ほかには。

学生 2 何も感じない。

バクニック ああ、そうですか。平気で。

学生 2 そうじゃなくて、frustrated だったから何も感じられなかった。東京だったから。

バクニック ああ、そうですね。

学生2 人も、笑顔とかしない。本当に cold water という感じ。

バクニック そうですね。これから少し先に入るテーマですね。ちょっと待って下さい。次に、カルチャーショックについての説明があります。

カルチャーショックの三段階

Segment 2: Three Stages of Culture Shock:

Dr. Olivia Aspen: “People say that there are three stages to culture shock. The first part is finding that everything is FINE and you don’t have any problem and it’s BEAUTIFUL and I LOVE this place. It’s like a honeymoon state. Everything is perfect.

And then little by little you start getting irritated. And what happens then is that NOTHING is good. You don’t like Americans, this food is terrible, the weather is horrible. You don’t think that I am experiencing culture shock. What you think is: ‘I don’t like this place.’

And then after some time of that the two things start getting together and there are things you like and adjust to and there are things that you will NEVER like and will never adjust to and never feel comfortable with.”

バクニック これは、オリビア・アスペンという心理学者の説明です。カルチャーショックについての三段階の説明です。この先生の説明は非常にはっきりしていて、わかりやすいと思います。第一段階は、すべていいんですね。完全に happy で全部新しく、とてもうれしいです。それで、満足してます、第一段階では。

それから、落ち込みます。何もかも無になります。食べ物もまずくて、天気までよくないです。自分に満足してないのではなくて、まわりに感じます。まわりがよくないとか何とか、イライラし始めます。気持ちが悪くなってしまって、落ち込みます。第一段階と第二段階のはっきりした区別はないと思います。最初から第二段階にすぐ入り込む人もいると思います。どこの国からでも、まわりの環境がわからないし、迷い込んでしまった状態で、どうしてもショックというのはあるんです。

ショックという言葉は、あまりいい言葉じゃないかもしれません。というのは、ワットとおどかされた時のショックと違って、自分のことじゃない感じでショックを受けています。それに気がつかないまま、やめてしまう留学生もいると思います。第二段階でもういやになって、日本が全然好きじゃない、私には合わない、と帰ってしまう人たちがいます。

あと、第二段階に入って、乗り越えることがありますね。乗り越えることが必要です。それで、だんだん、もっと現実的な第一段階と、もっと現実的な第二段階が

いっしょになりはじめて、本当に自分とまわりの区別のできる第二段階になって、第三段階がだんだんできてきますけど、それはちょっと時間がかかります。どのくらい時間がかかるか、はっきりわかりませんが、だいたい第一学期はたいへんで、それから、だんだんよくなってくるそうです。

段階のことについて、何かコメントとか質問とか自分の経験とか、何か話がありますか。自分の聞いたこととか自分の経験したことは。ハネムーン状態はどうですか。なかった？ なかった方が多いみたいですね。あった人たちは。

学生 はい。

バクニック 二人だけ。あ、三人。あとはいない？

学生 すぐ学校になったので。

バクニック ああ、学校に出ればハネムーンが終わってしまう。(笑)

学生 時差ボケがなおっても、授業に入ったり、毎日長い電車とか。

学生 それで、アメリカの教育システムと日本と違うから。

学生 アメリカは、行って、最初から授業聞かなくてもいいし。

バクニック そうですね、もう一つ大事なことがあります。手続きのことですね。国によって手続きがずいぶん違っていて、その苦労があります。このボストンの人たちが言ったのは、よく abbreviation、使います。まず、T N S、それから I S D に行って、それから T R T をとって下さい。どこでも、事務的な手続きは難しいと思います。まだ慣れてなくて、言葉もあまり通じないで、最初の手続きのところは非常に難しいことがあります。

価値観の違い

Segment 3: Cultural Aspects:

Dr. Kohl: "I think one expects that when you go to a new country that there will be differences, but ... you expect these differences will be in the area of customs of doing things differently. It comes as something of a shock to you to find that the differences that have the biggest effect are differences that bring into question your own personal values ... That sort of pulls the rug out from under you."

バクニック これは非常に大事な話だと思います。これはコール先生という人で、文化人類学者だと思いますけど、コール先生が言ったのは、異文化というのは習慣が違うと考えられていますけど、習慣が違うだけではないんですね。習慣だけだったら、だれでも子供と同じように習えるんですけど、どういうわけであまりよくないんでしょうね。留学生は。

学生 人間関係。

バクニック もともと意識的になってないところがある。それは、もし日本人だったら、自然に大人になるまでにはみんな気がつかないで、だいたい合ってますけど。留学生の

状態はちょっとずれてるんですね。大人に近いんですけど、社会的には子供っぽいんですね。かなり子供のようにですけど、子供とは全く違うところもあります。自分の文化を持ってるんです。新しく入ってきて、自分の文化がもうあるんです。割合完全にできてますけど、無意識的です。

自分のどこかに無意識的になっているところが、どうも壁にぶつかりやすいですね。壁になります。それがショックの第一の原因だと思います。自分の国でちゃんと当たっている、正しいやり方で、どうもここでうまくいかないとか間違ってるのか。価値観のことが大事です。大事なところは、価値観というのは、自分でわかりません。あたりまえだと思ってるんですけど、違うところに行くと、ぶつかって、自分の価値観もわかってきます。ぶつかって、苦労ですけど、それでわかる、悟ることがあるんです。自分の文化も異文化のことも、同じようにわかります。

それで、今度は、第二段階の話です。

第二段階

Segment 4: Second Stage:

At this point the students can't understand themselves:

Specific Difficulties mentioned:

(1) disorientation:

“overreactions to things”

“critical of everything”

“I was sort of slowly falling apart.”

(2) loneliness:

“I knew I had to make friends. I realized I had to take the initiative and call people and for me it was very hard—it seemed very pushy.”

バクニック I was sort of slowly falling apart. 自分がばらばらになってしまう。これは非常に深く感じてる例で、自分まで影響があります。異文化に入り込むと、自分への影響がないことはないんです。自分と言えば、まわりで自分が作られているでしょう。まわりが違ってくれば自分も違ってきます。今までの慣れてきた自分が急に孤独の状態、まわりがなくなってしまうから、自分も作らなければなりません。その作り方は、だれも教えてくれないんですね。

何とか生活の中で新しく自分が生まれると思いますけど。その自分と今までの自分はどやってうまくいくようになるんでしょうか。大丈夫でしょうか、今までの自分は。どうでしょうか。

学生 2 アメリカに行って、2年たって、言葉は通じますが、(母国と)考え方が全く違うから、今まで何やってたかなあという感じ。2年半たってもまだ何も知らない。いい状態と悪い状態が回ってくる。circle。3年たっても何もわからない。回って

くるんです。それで frustration。習えば習うほどわからない。

バクニック しかし、全く同じ circle じゃないと思います。こういう状態（上向きのらせん状）じゃないですか。難しいところがだんだん出てくると思います。というのは、いろいろな人間関係も、前と違ったような関係ができればまたわからない状態が出てきます。

学生 2 自分の国でいっしょうけんめい勉強して、いろいろ希望もあるから、留学して勉強したいと思って来るじゃないですか。そう思って来ると、言葉とか、何もわからないから、自分が何もないものになっちゃう。それで失望する。自分が自分に失望する。国では、よくできた、認めてくれたし。でも、アメリカへ行って、アメリカの大学に入って、失望する。日本に来て同じ。何もないものになってしまう。今まで何してたんだろう。

バクニック よくわかります。2 回目（の留学）も同じ状態になったのは、これは経験でよくならないみたいですね。

学生 2 自分の国の考え方と違うから、先生が言ったように、昔から、子供の時から、慣れたものがあれば、友達になってもギャップがあるから、私の家族や（国の）友達のようにわかってくれない。何か足りないような感じ。

バクニック どのぐらい日本に。

学生 2 私は 1 年ぐらい。

バクニック まだ、落ち込みますか。

学生 2 そうですね。

学生 日によって違う。(笑)

学生 日によって違うね。

学生 朝と夜でも。(笑)

バクニック もう少し、第二段階のケースをお見せします。

受け入れ側の態度

Segment 5: Specific Cultural Differences:

Time management: (Being late for appointment & being turned away)

Language differences: (Burger King episode)

バクニック アドバイザーの先生と予約した時、エレベーターが故障して、ちょっと遅れて行ったんです。それで、今日は会えないと言われて、とてもがっかりしたんです。これはザイルの人です。価値観のぶつかるころだと思います。

次のバーガーキングの話ですけど、カルチャーショックのところはどこですか。

学生 言葉がわからなかったんですけど。

学生 言葉じゃなくてあの店の態度。

バクニック 何で彼はショックだったんですか。ただ、for here or to go という言葉がわから

なかったということですか。

学生 次の人に、注文してくださいと。

バクニック そうですね。無視したんですね。わからなければ注文できないでしょう。それで、次の人。

学生 説明しないで。

バクニック そうです。彼女（店員）はどういう状態だったと思いますか。アメリカ人の人たち、どうですか。

学生 外国人のことわからないみたい。

バクニック どうしていいかわからないで、わからなければしょうがないと。言葉の十分な説明ができなかったんです。それで次の人（他の客）がうまく説明して。ここで食べるか、持っていくか。彼女は彼の状態が理解できなかったんです。それで、無視して。彼には大ショックだったんですね。よくアメリカ人はあまり理解しないと思いますけど。

学生 あまりやさしくないです。英語しゃべれなかったりすると。

バクニック そうですね。あまりやさしくないですね。私は（ビデオを見て）勉強になりましたけど、みんな忙しいそうです。忙しくて時間がないし、みんな留学生のことまであまり考えてないと思います。それはアメリカ人だけだと思いますか。ほかの国では。日本とか。

学生 それは国によってじゃなくて人の態度だと思います。

バクニック そうですね。人の態度と、自分の。コール先生が他のところで言ってますけど、みんなだいたい自分のつきあいで満足です。自分のつきあいでせいっぱいで、知らない人を教えるまでは、ちょっとできないんです。どこの国の人たちでも、自分のつきあいで忙しいです。

学生 アメリカではみんな似てるから。異文化まぜて文化ができたから、留学生に対して、あまり説明して教えてあげたいという気持ちがない。

学生 店の人たちは、一言話して留学生かどうかわからないから。

バクニック 私がアメリカから来てる留学生のクラスを教えた時は、帰る前は、クラスの人たちは、アメリカにいる留学生とこれからつきあうつもりで帰りました。自分で留学した経験がなければ、どこの国でも、非常にセンシティブな人でなければ無視することになります。

学生3 外国人にどう対応すればいいかわからない。私の先輩が日本に来た時、彼は日本語はまだわからないんですけど、日本人がいて、その日本人は日本語がわからなくても大丈夫だと言ってくれたんですけど、それは全部日本語で説明してくれたので、それは絶対彼にもわからないんじゃないですか。（笑）

バクニック そうですね。それはちょっと理解ができない状態ですね。

学生3 だから、外国人にやさしくしたい気持ちがあると思いますが、でもどうすればいいかわからない。

バクニック わからないで、いろいろ苦勞ですね、留学生には。日本語ができる留学生でも、

顔が日本人と似てないと、英語で話しかけたりするんですけど、それも同じようなことですね。やさしくするつもりですけど、そうじゃないこともありますね。第二段階についてほかにコメントがありますか。第二段階は非常にいろいろなことが入ってると思います。

学生 4 非常にまわりがやさしくしてくれても第二段階になる。日本の場合、みんながとてもやさしくしてくれるけど、それでも、まわりがいやになることがあります。まわりより、自分の問題だと思います。

バクニック そうですね。自分の問題です。私もその経験があつて、とても親切だったんですけど、それなのに、自分が落ち込みますね。どうしても落ち込みます。親切な日本人にはわからない状態ですね。一生懸命やっても、気持ちが悪いとかいやになるとか。難しいですけど。

カルチャーショックというのは、国によって違うというより、だいたい似てる状態だと思います。こういうアメリカでのカルチャーショックのことを見れば、自分が日本に来て経験しているカルチャーショックのこともだいたい理解できると思います。違うところもあると思いますけど。第一とか第二とか第三という段階は、非常に似たような状態がどこの国からの留学生でも、どこの国に行ってもあると思います。不思議なことかもしれませんが。迷ってるというか、足が地についてないというのが問題だと思います。足が地につくまでは、まわりの人たちがどんなに親切にいろいろやってくれても、浮かんてる、浮遊感覚の状態です。

第二段階を乗り越える方法

バクニック それで、第二から第三までは乗り越えることが非常に大事で、そこでの失敗が多いかもしれません。第一から第二までは、わからないままに自然に落ち込みますけど、第二から第三まで、自分の力でやらなければ、自然に乗り越えることはあまりうまくできないと思いますけど、どうやって乗り越えるんでしょうか。乗り越えた人、ここには。

学生 4 私のいけばなの先生から花を勉強しないかと言われた時、第二段階の時で、私は全然興味がないと言って、前は興味があったけど、第二段階だったから、非常に花をいじってるからやりたくないと言って。でも、落ちついて考えて、いけばなを始めて、先生にちょっとあやまって、自分で乗り越える。自分で、やる。

バクニック それは大事なことだと思います。自分の力でやってみることが。

学生 4 自分がまちがったと、はっきりまわりに言って。

バクニック それは、難しいですね。まわりがいやになって、自分が悪いと思わないで、(でも)だんだんわかってきて。留学生はできるだけ自分の力で友達を作らなければならないんです。自分で電話をかけたりして、私も入ってもいいとか、いろいろ自分からやれば、だんだん友達が作れるようになりますけど、自分だけですわって友達が来るまで待てれば、もう全然、第二段階にいつまでもいつまでもなお落ち込みます。だから、力が必要です。自分の力。

不思議なところは、ある日は全部いやになりますけど、かえって次の日は、全然違うように見えてくるんですね。自分の態度で、まわりの環境が見えるんですね。不思議なことです。

佐藤 今おっしゃったことで、日本でも同じだと思ったところがあります。ビデオの他の部分で、アメリカの学生たちが、会うと Hi, how are you とかあいさつするけど何の返事も待ってないとか、I call you って言うけど全然電話くれないとか、つきあい方が非常に表面的だという話があって、日本でもそういうことをよく聞くんですね。それで、そういう体験をした後で、ドイツの人でしたか、自分から電話をしてどうして電話をくれなかったんですかって聞いたという話があって。やっぱり自分から出ていかないとだめなんだ、と思いました。これは日本でもかなり言えることなんじゃないでしょうか。

バクニック その話はよく出てて、How are you ? の答えはなくてもいいんです。日本語で似てるのは「おでかけですか」。まじめに、「はい、私はここに行きます」とか言うと、困るんです。How are you ? の意味は、会って人間関係を確かめるという意味だと思います。I call you、よく言いますが、それも、バイバイ（笑）。本当に帰ってすぐ電話をするわけじゃないんですけど、留学生はそれを待ってたんです。それはあいさつだけです。

佐藤 日本でよくあるのは、「今度遊びに来てください」というのが。（笑）

学生 4 それぞれの国にそういう決まり文句があります。でも、I call you はだれも教えてくれない。日本語でいいえをはっきり言わないとか、そういうことは教えてくれない。自分たちは意識してないから。

バクニック そうです。言葉は生きてるものです。文法ではなくて、社会の中でしゃべってるもの、生きてるものです。それで社会的にいろんな意味があるんです。それはとても大事です。

学生 4 でも、それがわかるまでには時間がかかります。面白いのは、教えても理解できない。たとえば、あいづちとか、Noをはっきり言わないというのは、説明してくれても、冗談だと思いました。変な日本人、とか。（笑）頭ではわかってても、自分で経験しないと。

バクニック たぶん深く理解できないんです。だんだん社会的につきあいができれば、意味がわかってきて、つながってくると思います。（その社会に）入ってないと本当にわからないです、教えてくれても。

学生 全然。（笑）

学生 わからないですね。

バクニック じゃ、最後のところを見ます。

バイカルチュラル

Segment 6: Final Stage:

Dr.Kohl: "If you are successful you will approach being bicultural."

"Right now I feel very comfortable here."

"I feel more confident."

"I am much more relaxed."

"I feel more secure about my environment."

"I feel happy. I feel very very happy. I cannot believe it because four months ago I was crying and saying 'What am I doing here ?' This is great !"

バクニック 最後の第三段階の話はだいたいみんな自信がつく — 第二段階と全く逆の、気が楽だとか安定しているとか happy という状態ですね。それで、スイスの人ですけど、今言ったのは、4 か月前は泣いてたんですけど、不思議なことに、今うれしいんですって。コール先生が、ちょっとバイカルチュラルの話をしましたけど、バイカルチュラルは非常に大事なことだと思います。うまく行けばバイカルチュラルに近づくって言ってますけど、バイカルチュラルと、文化に適応することは、どういう関係でしょう。バイカルチュラルというのはどういう意味でしょうか。たとえば第二段階を乗り越えることは、バイカルチュラルと関係あるんでしょうか。

自分と異文化の関係が大事だと思います。自分を捨てて、100%捨てることは、全く適応することじゃないと思います。異文化に適応することは、ちょっと自分のセルフを捨てる感じですね。本当は自分がセルフを持って異文化に入り込むんですね。それで、さっき言ったように、まだ価値観が、私の価値観は全く違いますけど、(その文化のやり方で) やりますね。もうやらなければいけないんですけど、自分の立場はあるんです。それは大丈夫だと思います。それは healthy だと思います。全く異文化に、全く日本人と同じ立場にはなれないんですね。

学生 できないです。

バクニック できないでしょう？ もう自分も大人です。やり方としては、できるだけやった方がいいと思います。まわりはそれを見てるんですから。ただ、自分もあるんですから、100%いいと思わなくても、やるだけで、形として。

学生 2 韓国に行っても居場所がないし、日本にいても私の居場所がないし、アメリカに行ってもカルチャーショックです。

バクニック そうですね。帰国する時はどうでしょう。もう何年も外にいて、全然違う国に、違う世界に入り込んで、帰ってきてどうでしょう。まわりの人たちは。

学生 2 自分ではちゃんとわかってるから、自分は自分に満足してるんだけど、(笑) 全く違う。

バクニック 違う時はまたショックになるとは思いますけど。

学生 5 春休みも、ちょっとショッキングでしたね。2 週間ぐらいアメリカへ帰って、アメリカ、ここで住めるかなあ。(笑)

バクニック そうですね。可能性としては、どこへも住めない状態になる。(笑) でも、どこでも住めるようになる状態もあると思います。韓国にも、日本にも。それもだれでもあると思いますけど、まあ、reverse culture shock がないことはないので、難しいですね。

ただ、カルチャーショックというのは、自分のことですけど、自分だけじゃないと思います。違う世界に入った状態の影響でだれでもショックを受けるんですから、それを考えれば、少し気楽になるかなあと思います。これは慣れるまでの状態です。慣れてきて、まわりといろんな関係ができてれば大丈夫です。最初の状態、地に着いてない状態は、自分だけの苦労じゃないですね。それがわかれば、もっと気楽になると思います。

“Cold Water” の使い方

バクニック 最後に、ビデオについて、全部見てないんですけどどう思いますか。日本にいる留学生としては、勉強になると思いますか。どうでしょうか。

学生 5 人類学の学生として、日本に来る前に、何回もカルチャーショックのことを読んで、よく読んだのに、来たらやっぱり自分の経験は違いました。読んだことと。実は同じビデオをアメリカで見ましたけど、その時わかったと思ったのに、2 回(見たら)、もっとよくわかりました。その経験があるから。

バクニック さっきの、言葉の使い方と同じ状態だと思います。経験がなければ理解ができないし、経験がもっと深くあれば、何度も見ても見方が違うと思います。面白いですね。教材だけでは、うまくならないと思います。

学生 見ることで、自分のカルチャーショックを考えることができます。

バクニック そうですね。

学生 2 先入観を作る原因になるかもしれません。あ、アメリカはそうか、と思って。行こうと思ってる人は、ああ、アメリカは冷たいかなあ、と。

学生 最近日本で、アメリカで人種差別されたことがありますかという本が出たと聞きました。あの本、読んで、私の英会話の学生たちが来て、本当にアメリカはそうですか、先生はどうですかと聞かれて、ちょっと困りました。

学生 2 あれだけ見せたら、先入観になる。でも、あの人たちが大丈夫だから、私も大丈夫かな、と思えば、大丈夫なだけけど。

バクニック じゃ、(ビデオを) 見ない方がいいと思いますか。(笑) どう思いますか。いつ見た方がいいと思いますか。

学生 アメリカに行ってから見れば、自分と比べるでしょう。

バクニック オリエンテーションとして、来てる人たちのオリエンテーションですね。それと、まわりの関係のある人たち、事務の人とか教授とか、いろんな人たちも見てるんです。アメリカ人にも、たいへん勉強になります。

学生 アメリカ人にとって、勉強になるんじゃないでしょうか。留学生たちがそう思っているということ。

バクニック お互いに勉強になりますね。

じゃ、いろいろな意見を聞かせていただいて、どうもありがとうございました。

3. 考察——討論を終えて（バクニック記、佐藤訳）

このビデオには論すべき点が数多くあるが、ここでは教授法に関する論点にしぼって述べたい。なぜアメリカの留学生の異文化適応を扱ったビデオをとりあげるのか。これが日本にきている留学生に何の役にたつのか。

“Cold Water”を見た学生たちの反応は、この映画の何かが彼らの心を動かしたことをうかがわせるに足るものであった。様々な国から来た英語力もまちまちな学生たちが、すぐさま積極的な反応を示した。彼らは即座に論じ始め、最後まで活発に議論を続けたのである。

彼らの関心の由来は、“Cold Water”における問題提起の仕方にあると思われる。このビデオは1988年に制作されて以来、かなりの成功をおさめ、既にこのジャンルでは「古典」としての地位を獲得している。このビデオは教師ではなく学生の姿を描いている。出演している学生たちは実際の留学生である。制作者（オガミ）は相当の苦勞をして、もともと100人いた学生の中から13人を選び出した。最終的に選ばれた13人の出演者たちは、いずれも彼らの経験に、聞く者に深く考えさせずにはおかないようなやり方で省察を加え、これを明確に表現することのできた者たちであった。

したがって、このビデオを見る留学生は、登場人物を彼らの分身と見なすことになる。しかし、それ以上に重要なのは、その同一視が経験のレベルにおいて行われることである。このビデオの焦点となっている学びのプロセスは、登場人物の経験にもとづいている。ビデオの中で、一つのプロセスが浮き彫りにされる。そのプロセスとは、専門家によって「カルチャーショック」の三段階として解説されている一連の変化の過程のことである。

ビデオを見た学生たちが登場人物を彼らの分身と見なしたのは、ビデオで描かれている異文化適応のプロセスが、ある文化圏に新しく入って行こうとするすべての者にとって、意義深いものだからである。どこの国の出身者であれ、どこの国に行こうとする者であれ、そのような異文化適応のプロセスを体験する。慣れ親しんだ環境を離れて、不慣れな土地に根を下ろして行かなければならないことによる異文化適応のプロセスは、外国暮らしにはつきものである。外国に住む者は皆、何らかの形で経験せざるを得ないことなのだ。その意味で、日本においても、留学生の「根無し」の状態に注目し、これを留学生プログラムにおける教育に取り入れていく必要がある。“Cold Water”はこの要請に応えることのできる教材である。

上記のことは重要な意味を含んでいる。学生たちの最初のコメントは、“Cold Water”というタイトルが弱すぎるということであった。彼らがあげたのは、“Ice Water”という言葉だった。これは日本もしくは日本文化そのものについてのコメントではないと思う。これは彼らが痛みをもって体験したカルチャーショックのプロセスについてのコメントである。彼らは単に新しい場所に入っていくプロセスを彼ら独自の言い方で表現しているにすぎない。

討論の後半の部分で、一人の学生がこのことをさらに詳しく述べていた。彼女によれば、日

本でとてもよくしてもらっているのに、それでもなお、時々意気消沈してしまい、周囲の人々のはたらきかけに応える気がなくなってしまうという。彼女は親切にされているにもかかわらず時として惨めな気分を陥らざるをえないことを非常に気に病んでいた。

この学生の発言も重要なことを表している。“Jumping into cold water”のプロセスを回避することは不可能なのだ。たとえまわりの人々が、ホームステイの「ハネムーン期間」の客扱いのように留学生を親切にもてなしてくれたとしても、このプロセスを避けることはできないのである。

文化的な「ショック」は、その衝撃をやわらげるものがどれほどあっても、取り除くことはできない。これは異文化適応のプロセスと同様に必然的なものである。人間は、肉体的にも、社会的にも、心理的にも、その環境との密接な結びつきにおいて形成されるものだからである。このビデオは、新しい土地での何も結びつくものがない最初の経験的な状況を取りあげている。そして、これは、留學生活の他の部分すべてに影響を及ぼしていくことである。教師や留學生プログラムの関係者がこれらの問題に気づき、取り組むことが必要である。

このビデオは、異文化適応をある種の「ノウハウ」として教えることの可能性を切り拓くものである。すなわち、留學生が身のまわりの環境に慣れる上での助けになる方法としての「ノウハウ」を求めることが可能である。授業の最初に、学生たちの具体的な身のまわりの環境を取りあげることが考えられる。たとえば、学生に近所や大学の生活環境を観察させ、その環境の中でどのようにすればうまくやっていけるかを学ばせることが可能である。ヌスバウム（第三章）が述べているように、留學生を対象とする授業が経験のレベルから開始されるならば、それは、学生・教師の双方に、直接的で型をなしていない知識と、より抽象的で輪郭のはっきりした知識との間にある溝を埋める手だてを与えてくれるのである。

“Cold Water” and Teaching Pedagogy

Jane M. Bachnik

National Institute of Multimedia Education

There are many aspects of *Cold Water* that can be discussed. Here I will focus on a single pedagogical issue: Why present a video in a Japanese classroom which focuses on cultural adjustment of international students in the U.S? Student response to the film provides a clue to this question: something clearly touches them in *Cold Water*. Students from a variety of countries (with varied levels of English proficiency) responded immediately and positively. They began and continued a lively discussion throughout the class period.

The clue to their interest lies, I think, in the focus of *Cold Water*. The video has enjoyed considerable success since its production in 1988. It is now a “classic” in its genre. The on-camera participants are themselves international students. The producer (Ogami) has taken considerable effort in culling appropriate students by selecting only thirteen from an original pool of over 100. She includes only those students who are able to articulate (and reflect on) their experiences in a way that is most thought-provoking.

Consequently, the video allows students to easily identify with their counterparts in the video. But more than this, the level of the identification is in the students’ *experience*. A learning process is outlined, which defines a series of transitions articulated by two cultural experts in the video as three stages of “culture shock”.

The basic reason the students identified with their counterparts in this video is because the *process of cultural adjustment* that is outlined in the video is valid for anyone who is a cultural newcomer, no matter what his or her country of origin or destination might be. The process of uprooting oneself from what is familiar and having to put down roots in an unfamiliar place is the most basic and unavoidable aspect of living abroad. Anyone who lives abroad must experience this discomfort in some way. The discomfort is what constitutes “culture shock,” which is not a “shock” at all, but rather a vague, nagging discomfort, which often can’t be identified.

The implications are important: The first comments the students made about the video were that the title *Cold Water* was not strong enough—they recommended *Ice Water*. Rather than a comment on Japan, or its culture, I take this to be a comment on the process of culture shock itself, and the fact that the students found the experience painful. I think they were simply saying that the process of coming to a new place is like “jumping into cold water”. Another student, later on, elaborated on this. She mentioned that despite being treated very well in Japan, she still sometimes felt out of sorts, and didn’t want to respond to those around her. She felt especially bad that in spite of being treated well, she still couldn’t avoid feeling miserable at times.

This student too is expressing something important. One cannot manage to get around the process of “jumping into cold water”—even by treating students nicely as guests in the “honeymoon period” of a homestay. In other words, one cannot remove the cultural “shock” by any amount of cushioning. It is a natural as well as a cultural process, since human beings are oriented through close relationships with their physical, social, and psychological environments, and when these relationships are changed radically, we experience estrangement and discomfort. *Cold Water* addresses the basic experiential situation of being “without moorings” in a new place, a situation which in turn, affects everything else in the students’ life. Because of this, it is necessary for teachers and program personnel to be made aware of these issues and to address them.

In this sense, the “rootless” situation of the students from abroad needs to be addressed and incorporated into teaching pedagogy in programs for international students in Japan. Although not portrayed in the video itself, the issues raised by *Cold Water* provoke possibilities for teaching that can address these issues. For example, teaching language and culture can be approached as *know-how* in ways that can assist the student to become familiar with his/her surroundings. Students could be guided to learn about both their neighborhood and university surroundings, and this knowledge could enable them in turn to function better in those surroundings. In this sense the students’ concrete surroundings could be the *starting focus* of classroom teaching. Once this experiential level—so important for students experiencing fundamental orientational changes—is addressed, it can then be used to spark interest in to more formal, abstract, (and necessary) forms of knowledge (see Nussbaum, Chapter 3). This cannot help but enhance the students’ experiences of living abroad.